報　告

看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響

髙野真由美[1)]

要　旨

本研究では、実習において看護学生が、老人の言葉がわからないために戸惑い、上手く聴き返せないようなコミュニケーション時に、学生の背景やエイジズムがその状況時の情緒状態に影響をあたえているのかを明らかにすることで、老年看護学におけるコミュニケーション教育に資することを目的とした。調査は自記式アンケートを用いて、学生背景に加えて日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) と、老人の言葉がわからない場面でのコミュニケーション時の情緒状態を測定するために作成した「緊張・戸惑いと心配」「無関心・興味無しと不安定感」「回避と停滞」の 3 因子の構造からなる 13 項目（Cronbach α 係数 =.859）を用いて分析をした。2006 年に調査協力の得られた看護学生 276 人（回収率 97.5%）うち欠損値の多いものを除いた 262 人 (94.9%) を分析対象とした。結果、FSA 得点から、看護学生のエイジズムは弱い傾向であった。次に、学生背景と FSA を独立変数に、老人の言葉がわからない場面でのコミュニケーション時の情緒状態の 3 因子を従属変数とした重回帰分析の結果、有意な影響が示されたのは、学生背景のうちの社会人経験の無い学生とエイジズムの強い学生が、「緊張・戸惑いと心配」因子、「無関心・興味無しと不安定感」因子、「回避と停滞」因子のそれぞれに影響を与えていた。つまり、社会人経験の無い学生とエイジズムの強い学生は、老人の言葉がわからないと、コミュニケーション時には緊張や戸惑いが強く、不安定で逃げたいといった否定的情緒状態の強いことが示された。

キーワード：看護学生、学生背景、エイジズム、情緒状態、コミュニケーション

Ⅰ　はじめに

コミュニケーション (Communication) とは、ラテン語の「伝える、分かち合う」というコミュニカーレ (Communicare) を語源としており、人が意思や感情を伝達しあうことで、方法はさまざまである[1)]。その方法として、言葉による言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションによるものがあり、両方が絡み合いながらコミュニケーションが成立されていることが多い。ところが看護実習で、看護学生（以下、学生と略す）が老人の使う言葉が理解できないことからコミュニケーション時の問題が見受けられる。例えば、「匙をとってくれ」という「匙」という老人の言葉がわからないことがある。さらに、わからないことや誤って解釈をしていても聞き返えさず、笑って誤魔化すことがある。学生が、老人の言葉を知ってるか知らないは生活の世代差であり、生きる世代が違えば生活の中で用いてきた言語にも差は生じる。だからこそ、わからない言葉をよく聴き、確認していくことはコミュニケーションの受け手としては必要な行為である。それなのに、何故学生はわからない言葉を確かめようとしないのか。これについては、老人の言葉がわからないことが要因となり、学生の内面で否定的情緒状態が強くなることで、積極的傾聴が出来ず、言葉がスムーズに出てこないなどコミュニケーションスキルと関連していることが報告されている[2)]。つまり、コミュニケーションが上手くとれない時の学生の内面にある情緒状態を理解することが大切と思われる。では、どのような要因のある学生が、コミュニケーション時に否定的情緒状態が強くなるのか。これに関連する研究として清水[3)]は、看護学生の老人との対話時のエイジズムを含んだ特徴と問題を指摘しているが、エイジズムそのものの測定と、そのことによる学生の内面への不安感情や情動状態への関連につい

1）川崎市立看護短期大学

ては述べていない。また、学生の生活経験から老人イメージの形成への関連を調査している研究[4]や、認知症のある高齢者とのコミュニケーションの研究は多数見受けられるものの、学生の生活経験や老人イメージがコミュニケーション場面へ影響を及ぼすというような先行研究は見当たらない。

そこで、本研究では、学生が老人の言葉がわからない時の情緒状態とそれに影響を及ぼしていると思われる、老人との生活や交流経験、エイジズムとの関連を検討する。

＜用語の操作的定義＞エイジズム：高齢者に対して抱く、偏見もしくは差別

Ⅱ　研究目的

看護実習場面において、学生が老人とのコミュニケーション時に、言葉がわからないときの情緒状態に影響を与える要因を明らかにすることで、老年看護学におけるコミュニケーション教育に資することを目的とする。

Ⅲ　研究方法

1．調査の手続き及び協力者

調査期間は、2006年7月7日～7月31日で、自記式質問紙を用いた。協力者は、3年課程の看護教育機関に在学する2年生と3年生で、283人に配布し、調査協力の得られた276人（回収率97.5%）である。そのうち、欠損値の多いものを除いた262人(94.9%)を分析対象とした。

2．調査票の内容

1）基本属性と学生背景：年齢と学年。社会人経験の有無、老人との同居経験、老人から世話を受けた経験、老人の世話をした経験、それぞれの有無。

2）日本語版Fraboniエイジズム尺度（FSA）短縮版[5]14項目（以下、FSAと略す）:「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評定で、得点が高いほど老人に対するエイジズムが強い結果となるように5～1点に得点化されている。

3）自作の老人とのコミュニケーション時の情緒状態（表1）[2]（以下、情緒状態と略す）で、「緊張・戸惑いと心配」「無関心・興味無しと不安定感」「回避と停滞」の3因子の構造からなる13項目（Cronbach α係数=.859）で、清水、今栄[6]による不安尺度（STAI日本語版）の状態不安尺度(A-State)との基準関連妥当性を満たしている。教示文は、「老人の言葉がわからない状況の時に、どの程度感じたか該当する番号を○でかこんで下さい。」とし、それに対し、「全くそうでない」「いくぶんそうである」「ほぼそうである」「全くそうである」の4段階評定で、得点が高いほど否定的情緒状態が強くなるよう1～4点に得点化した。（調査票の結果の表1は、髙野、長田が日本看護学教育学会第18回で報告したものを使用）

表1　情緒状態の測定項目と因子分析

（Promax回転後の因子パターン）

因子	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	α
第Ⅰ因子 緊張・戸惑いと心配	31.戸惑っている	.802	-.053	-.110	.870
	28.ドキドキしている	.787	.145	.026	
	29.失礼な態度で不快にさせていないか心配	.778	.052	-.066	
	27.機嫌が急に悪くならないか心配である	.761	.128	.091	
	25.困っている	.749	-.142	-.052	
	21.黙り込んでしまう	.424	-.212	.253	
第Ⅱ因子 無関心・興味無しと不安定感	30.おもしろい　*	.003	.754	.020	.719
	24.心が和む　*	.063	.732	.103	
	32.落ち着いている　*	-.267	.574	.234	
	26.興味深さを感じている　*	.324	.535	-.350	
第Ⅲ因子 回避と停滞	33.退屈であきてしまう	-.144	.162	.811	.781
	23.逃げたくなる	.365	-.029	.612	
	22.おっくうな気持ちである	.269	-.072	.592	
全体					.859

*は逆転項目

因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	—		
Ⅱ	-.358	—	
Ⅲ	.489	-.338	—

3．倫理的配慮

調査にあたり、学生には研究者より目的を説明し、協力の有無が学生の成績に影響しないこと、回収されたアンケート内容は外部にもれたり個人が特定されないよう処理すること、論文、学会発表等の目的以外には使用しないこと、分析後の結果は責任をもって廃棄することを口頭と文章で説明し同意を得られた学生のみに実施をした。

4．分析

基本属性と学生背景の項目を単純集計後に学生背景で答えた各経験の有無に対し、「あり」と答えた場合は1、「なし」と答えた場合を0のダミー変数に置き換え量的データーとして集計をした。また、FSAの得点も単純集計をした。次に、学生背景とFSAを独立変数に、老人とのコミュニケーション時の情緒状態の3因子を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行ない因果関係をみた。分析には統計ソフトSPSS14.0 J for Windowsを用いた。

Ⅳ　結果

1．学生背景とFSAの結果

学生背景は、年齢の平均が21.4 ± 3.9歳、社会人経験のありが40人(15.3%)、なしが221人(84.4%)、無記入1人（0.4%）で、社会人経験のある学生は2割に満たなかった。次に、老人との同居経験のありが109人（41.6%)、なしが153人（58.4%）であった。そして、老人から世話を受けた経験のありが157人(59.9%)、なしが105人（40.1%）で、世話を受けた経験のある学生が半数以上いた。また、老人の世話をした経験のありが98人（37.4%)、なしが164人(62.6%）で、世話をした経験のある学生は、4割弱で少なかった。次に、FSAの合計得点は、最大が49点、最小が14点、平均が27.7 ± 6.1点で、各項目の平均が「どちらともいえない」の3.0点を上回った項目は「3．多くの高齢者は過去に生きている」の1項目のみで、看護学生全体で見た場合のエイジズムは弱い傾向であった（表2）。

表2　FSAの各質問項目の平均と標準偏差

(n=262)

質問項目	平均	標準偏差
(1)多くの高齢者(65歳以上)はけちでお金を貯めている	2.62	1.0
(2)多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	2.42	1.0
(3)多くの高齢者は過去に生きている	3.06	1.1
(4)高齢者と会うと、時々目を合わせないようにしてしまう	1.72	0.9
(5)高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	1.36	0.6
(6)高齢者は、若い人の集まりによばれた時には感謝すべきだ	1.58	0.8
(7)もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	1.84	0.9
(8)個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	1.89	0.9
(9)高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	1.29	0.6
(10)ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	2.10	1.0
(11)高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	1.31	0.6
(12)高齢者とのつきあいは結構楽しい　＊	2.03	0.9
(13)できれば高齢者と一緒に住みたくない	2.23	1.1
(14)ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	2.27	1.1

＊は逆転項目

2．情緒状態に影響を与えた要因

老人とのコミュニケーション時の情緒状態の3因子を従属変数とした重回帰分析を実施したところ、年齢と社会人経験で多重共線性がみられたため年齢は除外し社会人経験を投入した。その結果、有意な影響を示したのは（表3）、「緊張・戸惑いと心配」因子に対しては社会人経験 (p<.01) と FSA (p<.05) で、社会人経験がなくエイジズムの強い学生ほど緊張や戸惑いと心配が強い状態であった。また、「無関心・興味無しと不安定感」因子に対しても社会人経験 (p<.05) と FSA (p<.001) が有意な結果を示し、社会人経験がなく、FSA が強い学生ほど無関心や興味がなく不安定な状態であった。さらに、「回避と停滞」因子に対しても、社会人経験（p<.01）と FSA（p<.001）が有意で、社会人経験がなく FSA の強い学生ほど、回避し逃げたい情緒状態の強い結果が示された。つまり、社会人経験のない学生とエイジズムの強い学生は、老人とのコミュニケーション時に言葉がわからないと、否定的情緒状態が強くなることが示された。言い換えると、社会人経験があり、エイジズムの弱い学生は、老人とのコミュニケーション時、否定的情緒状態が弱いことを示すといえる。

一方、老人との交流経験と考えられた要因の老人との同居経験や、老人から世話を受けた経験と老人の世話をした経験では、有意な影響を示さなかった。

尚、決定係数（調整済み R^2）は、「緊張・戸惑いと心配」因子では .129、「無関心・興味なしと不安定感」因子では .122、「回避と停滞」因子では .244 と低い数値であった。

表3　情緒状態に対する老人との交流経験と FSA の関連

(n=262)

	第Ⅰ因子 緊張・戸惑いと心配		第Ⅱ因子 無関心・興味無しと不安定感		第Ⅲ因子 回避と停滞	
	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数
社会人経験	−.229 **	−.318 ***	−.216 *	−.246 ***	−.176 **	−.219 **
老人との同居経験	−.097	−.127				
老人から世話を受けた経験	−.073	−.143			−.114	−.179 **
老人の世話をした経験	.102	.126				
FSA	.113 *	.176 ***	.225 ***	.256 ***	.431 ***	.463 ***
調整済R^2	.129 **		.122 ***		.244 ***	

*p<.05　**p<.01　***p<.001

V　考察

本調査から、老人とのコミュニケーション時に、わからない言葉がある状況にあっても、社会人経験のある学生は否定的情緒状態が弱かった。これは、社会人としての経験のある学生は、年齢も高く、職場や仕事を介して様々な背景と年齢層にある人との交流経験がある。そういった多種多様な人々との関係性のなかで、言葉の駆け引きを通して身に付けたコミュニケーションは、落ち着いて関わるためのスキルも身につけていると思われる。さらに、社会人経験のある学生は、老人とのコミュニケーション時に、興味関心を寄せながら安定した気持ちで聴いていることから、問題を解決していこうとする姿勢にも繋がっているのではないかと推察される。

次に、エイジズムについては、元来エイジズムを強くもっている学生ほど、老人に対する認知と差別的な態度や嫌悪などから、老人との接触を好まず回避するような感情が強くある。それが、老人とのコミュニケーション時に言葉のわからない状況に遭遇すると影響要因となり、強調化されることによって、緊張や戸惑い、無関心で逃げたいといった否定的な情緒状態になっているのではないかと考えられる。

そのために、わからないことを表現し、聞き返すような積極的なコミュニケーションスキルがとれないのではないかと考えられる。瀧井[7]は、「先入観などにより偏狭であったり、過剰に緊張していたり、危機的状況により防衛以外に自分を保全できないときなどは、相手の言葉を自分の中には取り込めない。このようなときは、共感も成立しえない」と、相手に対する認知や感情状態の問題を述べている。すなわち、学生が老人に対するエイジズムを持つということは、自分自身が老人を受け入れる心の広さを狭めてしまう。そういった心の余裕のなさからはお互いの感情の触れ合う交流ができなくなり、関心を持ちながら傾聴をすることができなくなる。つまり、エイジズムが強いことによる否定的な情緒状態は、老人とのコミュニケーションを阻害する要因となっていることがいえる。

一方、老人との同居経験や老人の世話の経験が、有意な影響要因とならなかったのは、同居をしているからといって対話など直接的な交流があるとはいえない場合もあるのではないか。また、老人の世話を受けたり、世話をした経験の程度や仕方もあり、相互的な関係や交流が存在しているとは言い切れないことから関連を示す要因にいたらなかったと思われる。このことから、今後、老人との交流経験の調査には、項目の内容の検討の必要性があることを考えさせられた。

さらに、重回帰分析の決定係数（調整済み R^2）の値から、回帰式の有効性が高いとは評価しがたい。そこで、今後にむけて独立変数として投入する項目の数と内容の有用性を考慮し検討していく必要がある。

Ⅵ　結論

1．老人とのコミュニケーション時にわからない言葉があると、社会人経験のない学生は否定的情緒状態が強くなることが関連していた。つまり、社会人としての経験が、コミュニケーション時の情緒状態への影響要因の一つといえる。
2．老人の言葉のわからない状況におかれた時に、学生の元来あったエイジズムが強調化されることによって、否定的情緒状態に影響する。
3．老人とのコミュニケーションがとれるためには、学生が安定した情緒状態で関わることが大切である。そのためには、学生と老人との交流経験を通したエイジズムへの教育的介入の必要性が示唆された。

Ⅶ　おわりに

戦後数年までは、日常生活の中で多種多様な相手と言葉を交わす交流の結果、語彙を増やし言葉の駆け引きからコミュニケーションを学んでいた。その機会が少なくなった現代において、いかに老人が生活の場面で感じていることを聞けるかが、共感を伴った言葉の理解につながる可能性があると考えられる。よって、今後とも地域で生活をする老人との交流がもてる実習の展開を工夫していくことを検討していきたい。

引用文献

1）奥野茂代．高齢者ケアにおけるコミュニケーションスキル．高齢者看護プラクティス高齢者のための高度専門看護．中央法規，2005，p.20.

2）高野真由美．長田久雄．看護学生が老人と関る際の情緒状態とコミュニケーションスキルの関連．第18回看護教育学学会学術集会論文集．2001，p.88.

3）清水裕子．看護学生の老年者との対話の問題と特徴．老年看護学．Vol.11，no.12，2007，p.56-63.

4）大谷英子．松木光子．老人イメージと形成要因に関する調査研究(1)大学生の老人イメージと生活経験の関連．日本看護研究学会雑誌．Vol.18，no.4，1995，p.25-37.

5）原田謙，杉澤秀博，杉原陽子他．日本語版Fraboniエイジズム尺度（FSA）短縮版の作成―都市部の若年男性におけるエイジズムの測定―．老年社会学．Vol.26，no.3，2004，p.308-319.

6）清水秀美，今栄国晴．STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成．教育心理学研究．Vol.29，no.4，1981，p.348-313.

7）瀧井ヒロミ．看護におけるコミュニケーションスキル．鈴木正幸編集．看護のための教育学―「知る」から「分かる」への教育．メヂカルフレンド社，1993，p.116-139.